

進学“地元志向”は本当に強まっているか？

受験生の“地元志向”が強まっている……近年、そんな声が、高校の進路指導や大学の入試の現場からよく聞かれる。しかし、この傾向は本当にあるのだろうか。もしあるのなら、どの程度の傾向なのか。考察した上で、専門家に話を聞いた。

「ヤンキー経済」に見る若者の狭い地元志向

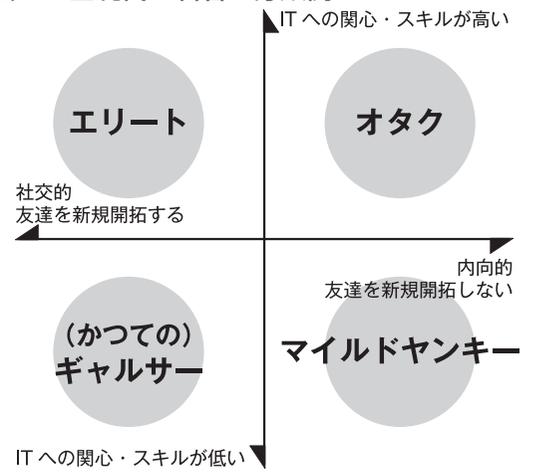
広告代理店に勤めるマーケティンングアナリスト、原田曜平氏が著した『ヤンキー経済』(幻冬舎新書・2014年)が話題を呼んだ。若者の極端な地元志向を独自の調査で示し、半徑数キロメートルの生活圏にこだわる若者の姿を紹介している。副題は、「消費の主役・新保守層の正体」だ。

著者は、極端な地元志向を持つ「地元族」が生まれた背景を、次のように分析する。……ゼロ年代後半以降の大人は、完全にしょぼくれています。まったくもって、反抗するに値しない、脆弱な存在に成り下がりました。

しかも、その大人たちの姿は、未来の自分の姿でもあるのです。高学歴で、かつ大手企業に勤める親でさえ、リストラの危機にある。不本意な職場に異動を余儀なくさせられている。報道からもそんな話ばかりが耳に入り、「いい会社に入れば一生安泰」

など絶対にありえないことを、自分の両親やマスコミから学んでいるのです。(中略)以上のような環境要因から、上京志向のない地元族や反抗精神の薄い残存ヤンキーが生まれたのです。(中略)一部の突出して有能な人間を除けば、「上京して一旗揚げろ」とこの現実性がまったくない時代になりました……

図1 ■現代の若者の分類例



『ヤンキー経済』(原田曜平著・幻冬舎新書)に掲載された図をもとに作成。

著者は、現代の若者像を4分類する。軸は二つで、一つ目は「ITへの関心・スキルが高い」か「ITへの関心・スキルが低い」。二つ目は「社交的 友達を新規開拓する」か「内向的 友達を新規開拓しない」。この2軸を使って4分類すると、右のように「オタク」「エリート」「マイルドヤンキー」「(かつての)ギャルサー」に分類できるという(図1)。この中で、地元族は右下の「マイルドヤンキー」

「マイルドヤンキー」とは、かつて「不良」と呼ばれた「ヤンキー」が絶滅危惧種になって代わりに現れた、怖くなくなった(マイルドな)「残存ヤンキー」(少数派)と「地元族」(多数派)が形成する若者群を意味する。ギャルサーとは、ギャルサークルの略語で、ある層の行動的・社交的な若い女性を指す。著者の調査の中で興味深いのは、マイルドヤンキーに属する地元族の中には、私立などの4

●特集 進学“地元志向”は本当に強まっているか？



『ヤンキー経済』(原田曜平著・幻冬舎新書)

年制大学に通っている若者もいるということだ。中卒で働いている若者と大学に通う若者が混在しているグループが、全国の地元族の中によく見られるという。「共通しているのは、徹底したキャリア志向のなさ」とも指摘する。

……「困らない程度に稼げて、地元の友人との時間をちゃんと確保できれば、それでいい。忙しくなりすぎるのは嫌」。彼らの意見は概ねそんなところ……

かつて取材した東京都立高校の先生が、次のように話していたことがあった。「進路指導の面談で、保護者から『都立高校のような大学はないのですか』と聞かれて驚いた」。その学校は進路多様校で、大学進学を最初から希望して入学する生徒は決して多くない。しかし、高校3年生になると、比較的近くの

大学進学の地元志向は本当にあるのか？

私立大の推薦入試やAO入試で進学ができる可能性を知り、生徒が保護者に相談し、学費の安い公立で通いやすい近場の大学はないのかと、考えが進展したのだと思われる。地元志向の大学進学を求める生徒や保護者の一例なのかもしれない。

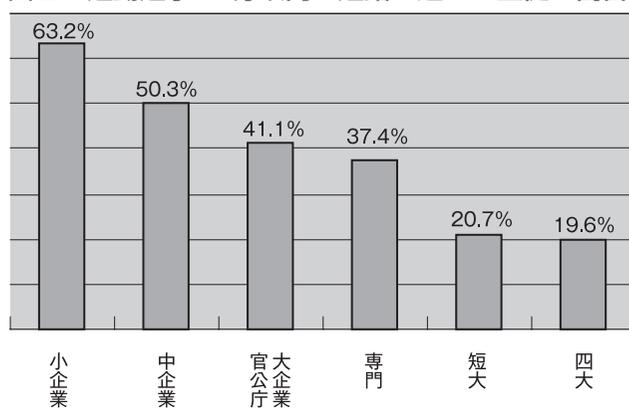
『ヤンキー経済』が発行される約3年前、東京大学の中村高康教授(大学院教育学研究科)は、若者の極端なローカリズムについて「都市部高校生の進路選択とローカリズム」と題する論稿を発表した(中村高康編『進路選択の過程と構造』(ミネルヴァ書房・2010年)。05年から08年にかけて、関西のある県

5校で調査を実施。その調査の中で、専門高校を含む進路多様校で、就職や進学の進路の決定要因として「近いこと」が重要視されていることを浮き彫りにしている。

高校3年の進路決定時にインタビュー調査を実施したのは

104人。そのうちで明らかに「近いこと」を進路決定の理由としていた14事例をはじめ、「近いこと」に言及していたり、その条件を考えていた可能性のある事例を含めると、かなりの数にのぼっていた。この論文で、若者の狭小なローカリズムの代表的な例が紹介されている。……インタビューでは「近場」の定義を尋ねているが、この生徒は「Y市内」だといっている。(中略)Y市というのは高校があるXとは鉄道で二駅ほどしか離れていない。こうした事情を踏まえると、この生徒が現に通学していた高校のある近隣のX市にさえ出たがらない狭小なローカリズムのもとで進路選択を進めたことがわかる……

図2 通勤通学30分以内の進路を選んだ生徒の割合



中村高康編『進路選択の過程と構造』(ミネルヴァ書房)に掲載された図をもとに作成。関西圏の進路多様校5校で調査。徒歩または自転車での30分以内の進路に決定した高校3年生の数から算出。

取り上げられた14事例は、決して特殊ではなく、中村教授が指摘する高校生の「狭小なローカリズム」は、『ヤンキー経済』の著者が指摘する「地元族」に通じる。しかし、中村教授は、「狭小ローカリズム」を押し通すことができない高校生たち、特に大学進学者たちの存在も見出している。

……狭いローカリズムを前面に出そうとしても、企業に比べると大学が圧倒的に少ないので、そもそも大学がその生徒にとって「近い」とされる主観的圏域に

一つも存在していない場合が当然あるわけである。その場合はやむを得ず彼らはローカリズムの境界を拡げざるを得ない。このことは、意図せざる帰結ではあるが、進学動機によってローカリズムの半強制的修正がなされる可能性を示唆している：

調査データからも、大学進学によって狭小ローカリズムが修正される傾向が見える(図2)。先に紹介した都立高校の生徒と保護者の例は、かつては大学に進学することのなかった層の高校生、地元を離れて進学するようになって生まれた不安が根底にあるのかもしれない。そんな生徒も、公立高校のような大学はないと知り、狭小ローカリズムを修正するのかもしれない。

難関大学の志望者にもローカリズムはあるのか？

『ヤンキー経済』では、有能な若者は上京して大都会でチャレンジを続けると指摘されている。しかし、大学の入試担当者に話を聞くと、難関大学でも全国から学生が集まらなくなった

という。昨今、難関の私立大が各地で入試を受けられるようにしたり、国立大も含めて、自宅から通学できない学生に給付型の奨学金を用意したりなど、全国から学生を集めるための方策が目立っている。

進学校における難関大学の志望者に、なるべく近場の大学を選ぼうとする傾向が強まっているのだろうか。先の中村教授に取材して、この点を質問したところ次のデータを示された(表1と表2)。

このデータは、中村教授が指導した、当時学生だった大川悠介氏が作成したもので、2013年1月に提出された卒業論文「難関大学の『ローカル化』現象の検証」に掲載された。大川氏は、難関大学がローカル化しているかどうかを検証するために、「吸引力スコア」という指標を考案。これは各年度に集まった学生の平均移動距離を示し、その経年変化を調べれば、どれぐらいローカル化しているかを検証できる。

用いたデータは、雑誌『サン

デー毎日』が毎春に掲載する「大学合格者高校別ランキング」。このランキングをもとに、旧帝大ごとに、合格者の出身高校と合格大学との直線距離(km)に各高校合格者数(人)をかけて、全合格者数で割るのである。論文の中では、次のように説明されている。

表1 旧帝大の吸引力スコア(単位:km)

| 大学 | 年 | 1972 | 1977 | 1982 | 1987 | 1992 | 1997 | 2002 | 2007 | 2012 |
|------|---|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 北海道大 | | 261.2 | 403.6 | 360.4 | 545.7 | 492.5 | 480.9 | 372.9 | 446.4 | 499.7 |
| 東北大 | | 198.5 | 211.4 | 260.2 | 391.2 | 299.9 | 251.3 | 223.0 | 251.6 | 244.2 |
| 東京大 | | 245.6 | 279.2 | 270.8 | 292.3 | 235.9 | 255.0 | 290.0 | 260.3 | 232.2 |
| 名古屋大 | | 41.9 | 52.0 | 54.0 | 100.3 | 92.7 | 91.1 | 73.3 | 61.3 | 98.3 |
| 京都市大 | | 152.6 | 160.3 | 165.0 | 222.6 | 168.3 | 172.1 | 159.6 | 153.3 | 163.7 |
| 大阪大 | | 93.9 | 94.5 | 100.2 | 174.1 | 115.9 | 122.2 | 100.5 | 133.0 | 152.5 |
| 九州大 | | 91.2 | 109.5 | 111.4 | 131.0 | 148.7 | 99.3 | 93.1 | 142.5 | 161.9 |

…吸引力スコアの値が大きくなれば、その年の合格者の移動距離が全体的に大きかったということであり、逆に吸引力スコアの値が小さくなれば、その年の合格者の移動距離が全体的に小さかったということになり、「ローカル化」現象が起きている可能性がみえてくる…

表2 1972年を1として相対化した吸引力スコア

| 大学 | 年 | 1972 | 1977 | 1982 | 1987 | 1992 | 1997 | 2002 | 2007 | 2012 |
|------|---|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 北海道大 | | 1.00 | 1.54 | 1.38 | 2.09 | 1.89 | 1.84 | 1.43 | 1.71 | 1.91 |
| 東北大 | | 1.00 | 1.06 | 1.31 | 1.97 | 1.51 | 1.27 | 1.12 | 1.27 | 1.23 |
| 東京大 | | 1.00 | 1.14 | 1.10 | 1.19 | 0.96 | 1.04 | 1.18 | 1.06 | 0.95 |
| 名古屋大 | | 1.00 | 1.24 | 1.29 | 2.39 | 2.21 | 2.17 | 1.75 | 1.46 | 2.34 |
| 京都市大 | | 1.00 | 1.05 | 1.08 | 1.46 | 1.10 | 1.13 | 1.05 | 1.00 | 1.07 |
| 大阪大 | | 1.00 | 1.01 | 1.07 | 1.85 | 1.24 | 1.30 | 1.07 | 1.42 | 1.62 |
| 九州大 | | 1.00 | 1.20 | 1.22 | 1.44 | 1.63 | 1.09 | 1.02 | 1.56 | 1.77 |

2つの表とも大川悠介氏(元東京大学学生)の卒業論文「難関大学の『ローカル化』現象の検証」に掲載された表をもとに作成。

表2は、1972年時点点を1として、どれだけ増減したかを数値で表したものだ。1972年と2012年を比べると、名古屋大学が吸引力スコアを大きく伸ばしているほか、北海道大学や九州大学、大阪大学でも1.5倍以上の伸びを示している。この数値を見る限り、難関大学でローカル化現象が起きているとは言えない。

大川氏は、合格者を3人以上出した高校の数も調べている。すると、ほとんどの大学では、吸引力スコアの上下の変動は、合格者を出した高校の数の上下の変動とほぼ一致していることを見出した。これは、難関大学に送り込む高校の裾野がより広域に広がっている可能性を示唆する。この点からも、難関大学の受験生がローカル化しているとは、一概に言えないようだ。

**中村高康教授インタビュー
高校生の進学ローカリズムは本当に強まっているか？**

——高校生が大学進学を考えると、近い大学を志望する傾向が強

まっていると言われますが、本当にそうでしょうか？

中村 高校生のローカリズムが最近になって強くなったとは思いません。それは、もともとあるものだと考えています。多くの高校生は生まれ育ったところにいたい、と昔も今も思っている。それが私の仮説です。かつては、4年制大学への進学率が低かったので、大学を志望する高校生たちはローカリズムをねのけるような気概や野心を持っていました。進学校の中で育まれた面もあるでしょう。

しかし、最近は進学率がとても高くなり、大学の数も増えました。「わざわざ金をかけてまで東京に行かなくても、勉強する内容が同じだったらいいや」という判断をする高校生も出てきたのでしょうか。そんな高校生に、かつてのイメージで指導すると、「おかしいな」と違和感を覚えることがあるのかもしれない。

——進学校の生徒はどうでしょうか。近い大学を志望する生徒が増えていると感じる進路指導の先生

が、少なからずいます。

中村 経済的な理由が大きく影響しているのではないのでしょうか。地方から都会に出て、一人暮らしをして大学に通うのは、コストがかかりますよね。今の日本の経済状態を考えれば、生徒が家計に配慮して、近い大学を志望するケースはあるように思います。都会の国立大学の理学部や工学部に行くよりは、地元や国立大の医学部を志望するとか。いわゆる若者論の中で語られる「地元志向」は、経済的な要因を取り除くと、それほど強くはないと思っています。

——高校生の地元志向は、特に強まっているわけではないと？

中村 昔のデータがないので、比較できない面があります。ただ、メンタリテイの面が強調され過ぎてきている気がしています。最近の若者だけが地元志向を強めているとは、はっきり言えないと思います。例えば、今から15年前の調査で作られた論文でも、若者が狭小なローカリズムの中でフリーターを続ける実情がとらえられています。

私自身も、1990年代の終わりにインタビュー調査をしたとき、狭いローカルな世界にとどまりたがる若者たちに出会いました。昔からそういう若者たちはいたのではないかと。若者の志向性が変わったというよりも、環境の変化に合わせて進路の選択が動いていると考えた方が自然だと思っています。

また、「地元志向」という言葉は、メディアがあいまいな定義で流布しているところがあって、いろいろな要素が入り込んでいます。進学にかかわるところでは、大学のユニバーサル化という構造的な問題もあります。経済や日本の将来の社会にかかわる要素もあるでしょう。それを全部ひっくるめて「地元志向」と言ってしまうのは、かえって問題のつかみどころをなくしてしまう気がします。高校生の地元志向が高まっていると過剰に反応するのではなく、一旦踏みとどまって、よく調べて考えたほうがいいと思います。

(取材・文/宇津木聡史)